

冬の旅

一音楽評論家のスモン闘病記

志鳥栄八郎



冬の旅

一音楽評論家のスモン闘病記

志鳥栄八郎



朝日新聞社

志鳥榮八郎 (しどり・えいはちろう)

- 1926年、東京下町に生まれる。
- 現在、第一線で活躍する音楽評論家。
- 「レコード芸術」「音楽之友」「教育音楽」「FM fan」「ムジカノヴァ」に常時筆を執り、朝日新聞「試聴室」欄の創設当初からの執筆者。
- 著書——「大作曲家とそのレコード」「音楽 春夏秋冬」「学校レコード・ライブラリー」(以上音楽之友社刊)、「世界の名曲とレコード」全3巻(誠文堂新光社刊)、「私のレコードライブラリー」全3巻(共同通信社刊)、その他。
- 現住所 東京都世田谷区船橋1-35-22
Tel. (03)425-3337

冬の旅
—音楽評論家のスモン闘病記

定価 一二〇〇円

発行 昭和五十一年四月十五日

著者 志鳥榮八郎

装画 片岡真太郎

装幀 熊谷博人

発行者 角田秀雄

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋
© Eihachiro Shidori 1976

冬の旅

一音楽評論家のスモン闘病記

目

次

I

一章	消えた石灯籠	七
二章	“ダンプの鳥さん”	二五
三章	ダンプふたたび走り出す	三六
四章	運命の時	四三
五章	秋の落日	五〇
六章	蝕まれゆく肉体	五八
七章	社会への訴え	六六
八章	感染説の波紋	七三
九章	わたしを支えてくれたもの	八〇
十章	奇病一転して薬害	八七
十一章	冬の旅	九四

II

ルポ取材にあたって
被害者救済運動の先駆者——春本幸子さん

氣迫と執念——中村弘氏

不幸に次ぐ不幸——太田幸子さん

和歌に余生を託して——吉野菅枝さん

公害撲滅に熾烈な闘志——別宮逸郎氏

天井に白蟻がいつぱい——小原加賀子さん

雪道を転げながら——丸山英夫氏

無残な花の盛り——星三枝子さん

薬事行政を呪う——柳山逸郎氏

わたしには青春がなかった——染井榮氏

死の淵を覗きながら——菊池晴世さん

大悟の境地——島史也氏

III

一章 スモンとはなにか

二章 イームズの安楽椅子

三章 これでよいのか日本の医薬行政

付・キノホルムを含む薬品名

あとがき

三六

三三

三四

三五

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三九

三三

三三

三七

三七

I

一章 消えた石灯籠

一

その日、目を覚ましたら十時半だった。

わたしは、朝起きるのがいつもおそい。評論家として一本立ちになった昭和二十九年から、執筆は主に夜から明け方にかけてやっていたので、朝は目いっぱい寝るといのが、習性となっていたのである。

目が覚めると、真っ先に指先のしびれが気になった。二、三日前から、右手の指先のしびれがじわじわと広がりつつあったからである。朝目が覚め、意識がしだいにはっきりとしてくると、その日の行動に移る前に、まず指先のしびれのぐあいを点検してみるというのは、スモンになってから身についた習性のひとつであった。

ためしてみると、指先のしびれは前日よりさらに上がっていて第三関節まできており、指頭の感覚がまるでなかった。なんとなく嫌な予感がした。わたしのそれまでの経験からすると、指先のしび

れ感が強いときには、きまって目にもなんらかの影響が現れることが多かったからである。

目は、わたしのような物書きにとつて、とくに大事な器官である。朝起きて指先のしびれが軽く、したがって目の状態も良いときには気分も快調だが、逆の場合は、気分が悪い。朝起きたときの指先の感じは、いふなればその日一日のバロメーターなのである。

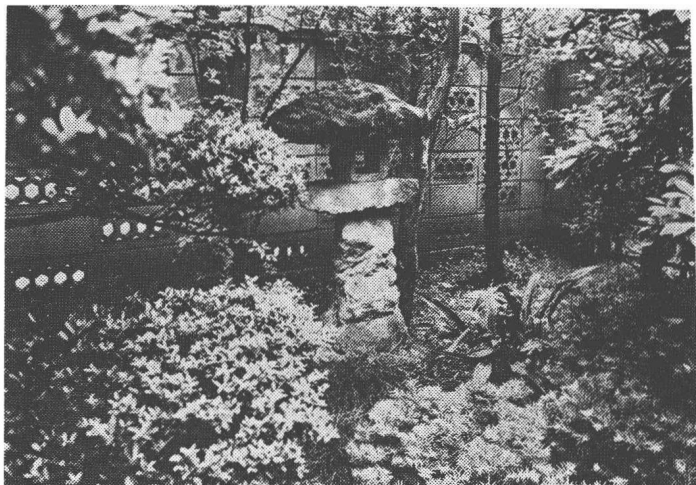
用心しなければいけない……、わたしはそう思いながら寢床を離れ、いつものように応接間へ行き、眼鏡をかけてガラス戸ごしに庭を眺めた。このように、わたしの家のささやかな庭を眺めることから一日を始めるというのが、朝のおそいものと同じくわたしの長年の習慣であった。

わが家の庭は、さして広くない。中央に大小ふたつのひょうたん形の池があり、そのまわりにいろいろな植木が植わっている。決して贅を尽くした庭ではないし、そうした成り金趣味も持っていないが、結構四季折々の風情があつて、わたしの目を楽しませてくれるのである。

わたしは夜型なので、ふだんあまり寝起きのよいほうではない。だから、寢床を離れても脳の半分は、まだ十分目覚めていない。それが、庭を眺めているうちにしだいにハッキリとしてくる。さあ、きょうもこれから一日の生活が始まるのだ。ボヤボヤしてはいられないぞ……、そんなにいくぶん改まった気分になり、フレッシュな気持ちで一日の行動を起こすことができるのである。

その日、ガラス戸ごしに眺めると、なんとなく庭の感じがおかしい。わたしは、一瞬おやつと思つた。そして、つぎの瞬間にわれとわが目を疑つた。いつもは真っ先に視野に飛びこんでくる庭の石灯籠が消えてなくなつていたからである。

この石灯籠は、わたしがたいへん気に入つて、その姿をいつも愛で楽しんでいたので、庭の南西隅、もっと正確にいうと、わたしのいつも眺める位置から約九メートル離れた池の向こう側に据えられている。それが、その日の朝に限って影も形も見えないのである。



この石灯籠が視野から消えた。昭和44年7月18日のことであった。

わたしは、おかしいな、植木屋が来てどこかへ一時的に動かしたのかな……いったんはそう考えた。そして、念のために女房の允子にたずねてみた。

「きみ、昨日植木屋来たかい？」

「いいえ。ここんとしばらく来てませんよ。なぜ？」

「だって、石灯籠がないんだよ」

「えっ！」

女房は驚いて茶の間からすっ飛んで来ると、わたしと一緒に庭を眺め、大声をあげた。

「あなた、ありますよ。あそこに、ちゃんと……」

そういつて庭の一角を指し示した彼女の手の先を、わたしは一生懸命に見詰めてみたが、ボーッと霧のようにかすんでいるだけで、あの石灯籠の姿は、かなしいかなわたしの目にはどうしても見えないのであった。そこにはいのではない、見えないのだ、と知ったときのわたしの驚き、それは、少々オーバーかも知れないが、まるで足もとから地球が音を立てて崩れていくようなショックであった。

のちに改めて詳述するが、わたしが、当時原因不

明の奇病とされていたスモンになったのは、一九六八年（昭和四十三年）の八月のことであった。それから一年足らずのあいだに、それまで人一倍タフだったわたしの体は、すっかりこの病氣のために蝕まれていた。

なによりも辛かったことは、視力を奪われたことだった。じわじわと、そして執拗な視力の低下が続いた。その状態は、近視の人の度が進んだのとは違い、「霧視」といって、あたかも薄い霧の中を歩いているかのように物みなすべてがかすんで見え、色の識別が定かではなくなり、それでいてたいへんまぶしい、というのがこの病氣で目をおかされた場合の特徴であった。スモンになっても目をやられないですんだ幸運な人たちもいたが、大部分は目に異常がきた。一夜にして闇の世界につき落とされた氣の毒な人もいる。わたしの場合は、進行が比較的ゆるやかだった。しかし、どんなに手を尽くしても視力の低下が進行することをとめることはできなかった。たいてい、手の指先のしびれが先に来て、それからガクツと視力が低下した。だから、指先の異常は目の危険信号のようなものであった。このときは、明らかに危険信号が出されていたのだし、梅雨のうつとうしい天氣が続いたあとでもあったのだから、本当はわたし自身もつと自分の体に氣を使わなくてはいけなかったのだが、あいにく仕事を立て込んでいたので、原稿書きや放送の録音などで相当無理を重ねていた。スモンになって一年、わたしはまだまだこの病氣の眞の恐ろしさというものを、じゅうぶん身にしみて知っていたわけではなかったのだ。あるいは、スモンをいくぶん甘く見ていたといってもよい。そんなわたしに、スモンは手痛いシッペ返しをくわせたのだった。

だから、その朝、石灯籠が見えなくなったと知ったときの強烈な驚きは、やはり同じような体験をした人でなくてはわかるまい。

ここで思い出すのは、ベートーヴェンのことである。ベートーヴェンは、二十二歳のとき、ボンか

らウィーンに出て、数年のあいだに、ピアノ演奏の名手として、また新進の作曲家として確固たる地位をこの「音楽の都」ウィーンで築きあげた。音楽家としての前途が洋々と開けてきたまさしくその瞬間に、彼は音楽家としてなにより大事な聴覚を蝕まれるという不幸に襲われてしまった。そして、三十二歳のころには、すでに取り返しつかないほど聴覚が損なわれていた。彼は、ひたすらその事実を周囲にかくしていたが、ある日、ついにそのことを弟子のひとりに知られてしまうのである。

一八〇二年、ベートーヴェン三十二歳の年の夏、彼は医者のおすすめで、ウィーンから馬車で一時間ほどかかるハイリゲンシュタットという景色の美しい村でひと夏を過ごした。そこへある日、弟子のリースが見舞いにやってきた。ふたりは連れだって散歩に出かけたが、しばらく歩いたところで、谷の向こうから笛の音が聞こえてきた。リースは、

「先生、笛の音がしてますね。だれが吹いているのか、なかなかうまいですね」

そう言ってベートーヴェンの注意をうながした。ところが、ベートーヴェンは、どんなに神経を集めて耳をすましてみても、リースのいうような笛の調べは、いっこうに聞こえないのだった。……

ベートーヴェンの伝記を読んだ方は、きっと伝記のなかにこうした場面があったことを憶えていることだろう。ベートーヴェンは、この一件によって耳の病が、彼自身が考えていた以上に悪くなっていることを知り、いったんは死を決意し、弟たちに宛てた遺書をしたためた。それが有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」である。もちろん剛毅なベートーヴェンは、安直に死に急ぎなどしなかったが、それほどこのときのショックは大きかったのである。ベートーヴェンの場合は耳、わたしの場合は目だが、ともに命から二番目に大切なものであることに変わりはない。

わたしは、天性樂天的に生まれついているせいか、すでにスモンでしだいに視力を奪われていながらも、この朝に至るまで、視力回復の希望を捨ててはいなかった。だから、女房に見えるものが、わ

たしには見えないのだと知ったときのショックは大きかったが、ここで、ふたたび楽天的な気分が頭をもたげたのだった。こんな状態は、今朝だけのことに違いない。あしたになれば情況は好転しているだろう。いやきつとそうだ。——わたしは、そう自分自身にいきかせた。そして、石灯籠が見えなかったのは、あるいは眼鏡が曇っていたせいかもしれない。そうも考えて、眼鏡のレンズを念入りにふいた。そしてもう一度眼鏡をかけて庭を眺めてみた。

やっぱり同じであった。石灯籠はいくら目をこらして見詰めてみても姿がわからなかった。ずっと手前にある太いモチの木は、それでも辛うじて見えた。しかし、これとても黒いものがファーツとオバケのようにつつ立っているのがわかるだけであった。それからその隣のシダレモミジ、これも枝が細いので、ウッスラとしか目に映らなかった。そのつややかな葉の色は、もはや見ることができなくなってしまったのである。

さらに目を池の面に転じてみた。池はふたつのひょうたんを連結したような形につくられており、奥のほうには小さな魚たちが集まり、ニシキゴイのような大きな魚たちはたいてい手前の池の方に集まっている。わたしは、いつも応接間からニシキゴイたちにえさを投げ与えていたので、一種の条件反射で魚たちは、わたしが応接間の戸をあける音を聞きつけるといつも寄ってくるのだった。わたしは、そうして集まってきているはずのニシキゴイの姿を目で追おうとした。ところが、やはりだめなのである。可愛がっていた紅白とか大正三色、秋翠など、みな色がとんでしまっただけでなにがなんだかわからなくなっていた。ただぼんやりと棒状の赤やオレンジや黄色っぽいものがユラユラと動いている、という感じだけしかわからないのだった。わたしは、そのうすぼんやりとしたうごめくものをめがけてえさをまいてやりながら、お前たちがわたしの目を楽しませてくれたその色とりどりのきれいな色彩とも、もうこのままおわかれだな……と淋しい気持ちになった。



池のコイの色も、エイザンゴケの緑も、この目を境に目にすることができなくなった。

わたしの庭には、エイザンゴケがじゅうたんを敷いたようにびっしりとはえている。このエイザンゴケは、梅雨どきが終わって夏になったところがいちばん美しく輝く。ちょうどこのころは、このコケがしっとりと落ち着いた色彩で、いちばん美しく見えるときにあたっていたが、眺めてみると、青いどころか、ただ一面に暗緑色のものがぼんやりと浮かんで見えるだけであった。このようにして、わたしは、この目を境にして、ついに緑という色を目にすることができなくなってしまったのである。緑だけではない。秋の紅葉のころのあの美しい赤や黄色も、わたしの視界からは永久に消えてしまったのだ。色彩もなく、物の形も定かでない、薄明の世界、そういう世界にわたしはほうり出されてしまったのである。それまでの経過からみて、このまま一挙に失明、ということはあるまい、とも思えたが、ここまで視力が転落した以上、そう簡単に回復は望めそうにない。これは、エライことになったぞ、——わたしは心細くなり、どうしてよいかわからなくなって、頭を抱えて応

接間のソファに身を沈めてしまった。

これから自分はどうしたらよいのだ。目はもつと悪くなるのだろうか。そうしたらおれの生活はどうなるのだ。あれやこれや、考えをめぐらせればめぐらすほど、ますます絶望のどん底につき落とされていった。そして、急にはどうしようという結論も出なかった。しばらくは思考力が停止してしまった感じであった。それほどわたしは打ちのめされていたのである。

二

やがて、わたしはまた気を取り直し、しびれた足をひきずりながら二階の書斎に上がった。書斎はいわばわたしの城である。この部屋に坐っていると、わたしは心が安まった。わたしは書斎に入らずこしでも心を落ち着けようと考えたのである。

書斎は二階の廊下のつき当たりにある。わたしは、書斎に入るとき以外は書斎のドアをあけたままにしておくことにしている。だから、書斎へ行くときは、階段を上がったところで、書斎の内部が目に入る。正面の壁ぎわの書棚には、わたしの仕事に関係のあるさまざまな本がびっしりと並んでいるが、だいたい中央のところに、属啓成氏きせいかいの名著、上下二巻の『ベートーヴェン』という分厚い本がある。これは、わたしの愛読書でもあるが、ダイダイ色の箱の背中に「ベートーヴェン」という題名が大きな書体で黒々と印刷されているので、目が悪くなってからは、検眼用としても使っていた本だ。その右隣には、アインシュタインのシュレーベルトやモーツァルトの評伝、また左隣には、イギリスのグローヴ音楽辞典が一組並んでいて、それらをわたしは視力を測る目安としても用いていた。

もちろん、それらは、わたしが健康なころには、階段を上がったあたりからよく見えたものである。